

No. 21
2008.Oct

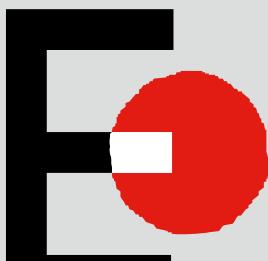


■イベント学会10周年記念大会 ■ ■ ■

イベント・イノベーション

Contents

開催概要／開会宣言 野川 春夫／開会挨拶 成田 豊	2
記念講演	4
『イベント・イノベーション』堺屋 太一	
シンポジウム	6
『イベントで社会を変革する』 モデレーター：宮本 倫明 パネリスト：鬼頭 宏、鈴木 大地、マリ・クリスティーヌ	
展示発表	12
10周年記念パーティ	13
口頭発表	14



イベント・イノベーション

2008年9月3日・4日の両日、東京・四谷の上智大学にて、イベント学会10周年記念大会を開催。「イベント・イノベーション」を大会テーマに、記念講演やシンポジウム・研究発表を通じてイベントが社会に果たす役割やこれからのイベントが目指すべき方向を討議した。今回は10周年を記念して、2日間にわたりて大会を展開。研究者やイベント実務者、学生による口頭発表、ポスター発表、展示ブース発表など、よりアカデミックなコンテンツを取り入れ、2日間で延べ500名が参加する大規模な大会となった。

イベント学会10周年記念大会プログラム

9月3日(水) 会場: 10号館講堂

13:30 「開会式」

開会宣言 野川 春夫 10周年記念大会実行委員長 順天堂大学教授
開会挨拶 成田 豊 イベント学会 理事長 電通最高顧問



13:40 「記念講演」

テーマ ~イベント・イノベーション~ 堀屋 太一 イベント学会 会長

14:45 「シンポジウム」

テーマ ~イベントで社会を変革する~
モダレーター/宮本 優明 Landa Associates Ltd代表
パネリスト /鬼頭 宏 上智大学大学院地球環境学研究科教授・地球環境研究所所長
鈴木 大地 順天堂大学准教授・ソウル五輪金メダリスト・ワールドオリンピアンズアソシエーション理事
マリ・クリスティーヌ 異文化コミュニケーション イベント学会顧問

16:30 「展示ブースオープニング記念発表」

テーマ ~検証可能なイベント評価手法発展のために~
栗原 毅 (株)電通 マーケティングサービス事業局 スペース・プランディング室

18:00 10周年記念パーティ

主婦会館プラザエフ 7階「カトレア」

9月4日(木) 会場: 12号館各教室

9:30~15:00 展示ブース発表
10:00~15:00 口頭発表
10:00~15:00 ポスター発表
15:00~15:10 閉会式



開会宣言 野川 春夫



10周年記念大会実行委員長 (順天堂大学教授)

これまで、イベント学会の研究大会は1日の開催でしたが、今回は10周年を記念いたしまして2日間にわたり開催し、よりアカデミックな形式を取り入れました。第1日目は記念講演とシンポジウム、明日は大勢の皆様の研究発表がございます。この場を通じて「イベントで飯を食う、食いたい、食っていくために」ということを、色々な形で模索していきたいと思います。ぜひ、ご参集のほど宜しくお願いいたします。

のがわ はるお

東京学芸大学教育学部卒業。オレゴン州立大学教育学部(スポーツ社会学)大学院博士課程修了。1998年から順天堂大学スポーツ健康科学部教授。日本生涯スポーツ学会会長、日本スポーツクラブ協会理事、東京オリンピック基本構想懇談会副座長などを兼任。『改訂 生涯スポーツ実践論』(編著)、『オリンピックの汚れた貴族』(監訳)などがある。イベント学会副会長。

PROFILE

開会挨拶 成田 豊



イベント学会理事長 (電通最高顧問)

イベント学会は、1998年3月に世界で初めてイベントを研究する学会として日本で誕生し、その学問を「イベントロジー」、即ちイベント学と名付けました。以来、様々な分野の研究者、実務者など百余名が集まり、定期的な研究大会や全国の自治体と連携した研究活動を続けて参りました。その成果の一端を皆様にご披露し、蓄積したノウハウと経験を会員の間で共有することが10周年記念事業の目的です。記念事業の1つは「イベント・イノベーション」をテーマにした本日からの研究大会です。堀屋会長の記念講演、シンポジウム、そしてイベント学会ならではのユニークな研究発表です。学生、研究者はもとより、イベントビジネスを支える多くの実務者、企業、団体の方々の発表にご注目ください。次に、これまでの研究成果を一冊にまとめた「イベント学のすすめ」の出版事業であります。堀屋会長をはじめ、イベントの研究とビジネスに長年携わる会員が分担して執筆し、装丁を浅葉克己理事にお願いした学会の総力を結集した事業でございます。ぜひ、多くの皆様に読んでいただければと思います。3つ目は、次の10年に向けてイベント学会が社会により貢献できる団体として組織を拡充し、様々な課題に対する具体的提言を創り出す基盤整備です。そのために、次代を担う若い方々が学会の活動に積極的に参加し、のびのびと活動できる環境を整えることが不可欠です。本日お集まりの皆様には、イベント学会の活動に対するさらなるご理解とご支援を切にお願いする次第です。今回の研究大会を機に、会員相互の交流がより高まり、イベント学会の自由闊達な活動により、日本がますます元気になるよう期待しています。

なりた ゆたか

PROFILE

東京大学法学部卒業。電通入社以後、約25年にわたり新聞広告のプロモート・企画に従事。第七連絡(現営業)局長、常務・専務を経て、1993年代表取締役社長。02年 代表取締役会長、04年最高顧問 電通グループ会長に就任。(現在)
1983年 ヨハネパウロ二世(ローマ教皇)より「シルベストロ騎士団長勲章」を授与。04年 フランス政府よりレジョンドヌール勲章オフィシエ受章。06年 中国教育部より教育支援記念章受章。

[主な公職]
(社)日本ABC協会 会長
(社)経済同友会 代表幹事特別顧問
内閣府「観光立国推進戦略会議」座長代理
総務省「地上デジタル推進全国会議」幹事会 座長
「富士山を世界遺産にする国民会議」理事長
法務省「行刑改革推進委員会」顧問

～イベント・イノベーション～

堺屋 太一 イベント学会会長

近代工業社会から知価社会へ

世の中は1980年代から20年程の間に大きく変化しました。近代工業社会から、今や知価社会になった。20世紀には、近代化は進歩の頂点だと考えてきましたが、人類の歴史の通過点の一つに過ぎなかった。近代工業社会をひととて表すと、物の豊かなことが幸せだと信じ、いかに物財を大量に生産するかを懸命に追求しておりました。

近代工業社会の始まりは、およそ200年余り前の1770年代。アメリカ独立戦争、フランス大革命、そして欧米を中心とした産業革命が進んだ時代です。蒸気機関で動く大きな機械、組織的に作る工場生産。産業革命以来、技術を向上させ規格化された生産を続けてきました。まず機械で部品を作る。それを労働者が一人一作業で組み立てる。その工程を流れ作業で行う。この3つが近代工業社会の仕組みですが、これを最初に始めたのが、アメリカで拳銃工場を経営していたサミュエル・コルトと言われています。西部劇によく登場するコルト拳銃には、名拳銃というものはありません。名刀、名槍はあっても拳銃には無い。全部同じ規格大量生産だからなんですね。シカゴの精肉業者のグスタフ・スイフトは、肉の加工に流れ作業を取り入れた。ヘンリー・フォードも、このシステムで巨大な工業製品を作った。ヒルトンホテルの創業者であるコンラッド・ヒルトンは、サービス業に転用した。ホテルの様々なサービスを一人一作業にして、どこのヒルトンホテルでも同じ品質のサービスを提供しました。スーパー・マーケット、ファーストフード店も全て同じ発想です。この近代工業社会の頂点は1960年代ありました。

「満足が大きいことが幸せ」な時代へ

ところが70年代になると、まず71年のニクソンショックで金とドルが交換停止になった。ベトナム戦争、石油危機、公害問題などを経験して、80年代には地球環境という新しい言葉が登場し、環境の有限性が意識されるようになりました。こうした時代を背景に「物財の多いことは本当に



幸せなのか？満足の大きいことが幸せではないか？」と説いた私の本『知価革命』を1985年に出版しました。日本語を含め9ヵ国語に訳され、英語でもベストセラーになりましたが、当時は「これは言葉の言い換えではないか？」という批判や嘲笑もありましたが、物財が多いことと満足が大きいことは全く違います。物財が多いことは客観的です。誰が見ても1台の自動車は3台の自動車よりも少ない。そして科学的です。誰がどこでやっても同じで普遍的です。それに比べ、満足は主観的です。その主觀を決めるのは、個人ではなくて社会であり流行です。従って価値は可変的です。今や、こういう世の中、つまり知価社会になった。

相互に発展する送達型と集人型の情報

さて、知価社会にとってイベントとは何か？『イベント学のすすめ』にも書いておりますが、イベントとは特別の情報環境、日常生活とは異なる情報の条件で非日常的です。これを計画的に作ることによって、人々に特別な知的興奮、つまり満足感を与える。これがまさにイベントです。

60年代、マクルーハンという学者は「街は潰れて村になる」と宣言しました。テレビ放送の普及によって、いわゆる送達型情報システムが主流になる。人を集める集人型情報は不要であり、都市も衰退すると発表して評判になりました。事実、当時のアメリカはニューヨーク世界博覧会も失敗、プロ野球の入場者も減り、音楽イベントも小規模化が進みました。しかし、世界の歴史を見ると、送達型の情報メディアが発展すると必ず集人型も発達する。例えば1851年のロンドン大博覧会は、郵便と蒸気機関によって成功したと言われています。送達型の郵便でPRし、集人型の汽車や汽船が活躍して600万人もの人が集まった。私は新聞紙上でマクルーハンと大論争を展開しましたが、結果として70年の大阪万国博覧会に6,422万人が集まり、大成功を収めて私の理論が正しいということになったわけです。

80年代になるとその様相がかなり変わり、人々が満足を求める動きが激しくなります。イベントの概念も変わって参りました。アメリカのプロ野球はチーム数が増え、サッカーのワールドカップも世界的なスポーツイベントに成長しました。音楽イベントも、大規模なものが盛んになりました。先日の北京のオリンピックの開会式は、会場の観客よりも世界中でテレビを見る人を重視した演出でしたね。大規模で見事なイベントでしたが、まさに送達型のテレビと集人型のオリンピック会場とが一体化した。見に行った人は5時間も暑い中で多少迷惑したようですが(笑)、ああいった発想もあるんだなと思いました。

知価創出を妨げる日本の社会構造

さて、特殊な情報環境、非日常的なイベントで観客を満足させて新しい価値を生む。知価社会において非常に大切なことです。しかし実現するのは大変難しい。イベントにはまず前例がなく、前例があるものはマンネリ化に陥りやすい。マンネリ化=日常化してしまうと、新しい価値の創造にならない。ところが、非日常的であればあるほど一体何をするのか分からぬ。近代工業社会の発想の人が必ず言うのは「何をするんですか？モノを見せてくれ下さい」。イベントは、事前にモノが見せられないため説得するのが難しい上、終身雇用の日本の社会では、一時的な行事のために人材を集めることも困難です。

近年、日本の社会的・国際的地位が急速に下落しておりますが、このように知価を生み出す能力に乏しいことも要因の一つだと思います。93年には世界1位であったGDPは、私が閣僚になった98年には6位になった。経済対策によって2000年には3位まで回復しましたが、06年には18位、去年はシンガポールにも抜かれて22位にまで下がった。世界の先進国30ヵ国の中で、日本はかなり下に位置しています。それはなぜか？日本は依然として、近代工業社会、物づくり社会で、中国やアジアや東欧諸国など賃金の低い国との競争を強いられている。知価を作らないといけないにも関わらず、物づくりに目を向けています。しかも、日本発の知価ブランドが一つも出てこない。ブランドには3種類あります。まず、西陣織のような伝統的ブランド。次に、大量生産ブランド。大量生産と大量広告で知名度を上げ、意志決定コストを下げることにより消費者に選択される商品がこれに当たります。そして、いわゆるラグジュアリーブランド、知価ブランドです。日本は、大量生産ブランドでは、自動車、電気製品、光学機器でも世界に認められていますが、知価ブランドは創出できない。イベントというのは、知価ブランドを生み出す契機でありながら、日本の社会構造から非常に難しい。企業や官庁も、大量生産の発想で継続的で日常的なことは得意ですが、アドホックなことは苦手です。ここが日本の直面している深刻な問題なのです。

イベントで日本の今と未来を元気に

日本の経済は株価も下がり、今年は貿易黒字も危ない。輸入額が増え、輸出額が増えない。人々の生活の質も低下しています。それを裏付けるのは金の輸出量です。去年日本から輸出されたのは29トン。しかし、年間の生産量は8.5トンに過ぎない。生産量の3倍もの金が輸出されたのは、形見の指輪や、若い頃に買った首飾りなどを売る人が



増え、それを潰して外国へ輸出しているからです。経済の成長する国には必ず金が集まります。中国は世界最大の産金国で、年間365トン生産している上、輸入も積極的です。インドにもロシアにも金が増えている。日本は、猛烈な勢いで失っているのが現状です。

世界の情報からも取り残されています。韓国で有名なデザイナーも、世界的に有名な中国の建築家の名前を知っている人もほとんどいません。香港のファッション事情も分からぬ。それは、霞ヶ関の官庁とマスコミ以外から情報が入らないため、まるで長崎の出島から外国の話が伝わったような情報鎖国の状態なんですね。ですから、ぜひ勇気を持ってイベントを開催し、様々な情報で人々を刺激し、満足を創出していただきたい。そして、日本が新しいブランドを提供できる、知恵の値打ちを創造できる社会に変革して欲しいと思います。最近は、企業も官庁も地方自治体もシェーリング傾向ですが、未来のために新しい価値を創造していただきたい。

そして、このイベント学会に参加される方にぜひ申し上げたい。文化というものは、儲からないと文化とは言えません。文化は儲からないから税金が寄付でやるというのは、まさに規格大量生産の考え方です。儲からないのは価値を創造していない証拠で、ぜひペイするイベントを考えいただきたい。コスト面だけでなく、出資者や観客が満足すれば、それはペイしたことになる。満足=ブランドです。そういった新しいイベントを、計画的にしっかりと作る。そして世間にも、その意義や価値を訴えていただきたいと思います。長時間ご静聴ありがとうございました。



さかいや たいいち

PROFILE

東京大学経済学部卒業後、通産省入省。日本万国博覧会、沖縄海洋博覧会などを手がける。1978年に退官。作家として『油断!』『団塊の世代』『峠の群像』などを執筆。1985年に発表した『知価革命』は、世界8ヵ国語に訳され、国際的評価を得ている。

1998年から2000年まで経済企画庁長官。現在、国家公務員制度改革推進本部顧問会議メンバー、道州制ビジョン懇談会委員を務める。

～イベントで社会を変革する～



人々を感動させる、知的興奮を与える、新しい満足を提供する——。人と人がふれあうことで、様々な効果を発揮するイベント。時には、一人ひとりの気持ちが大きなうねりとなり、ムーブメントを巻き起こすパワーを持つイベントが、より良い社会へと変革していくために何ができるか？今回のシンポジウムでは、21世紀に果たすべきイベントの役割、可能性を語り合っていただいた。

イベントがもたらす『変化』とは

宮本 本日は「イベントで社会を変革する」という大きなテーマについて、各界を代表してお三方にお集まりいただきました。まず、上智大学大学院地球環境学研究科の教授である鬼頭宏先生。歴史人口学を研究しているいらっしゃる鬼頭先生には、歴史人口学から見えてくる、地球環境の課題や問題点などをお聞かせいただきたいと思っております。ソウル五輪の金メダリストである鈴木大地さんは、先日の北京オリンピックも現地でご覧になっておりまして、オリンピックによる社会的・文化的な変化をお話いただければと思います。マリ・クリスティーヌさんは、愛知万博の広報プロデューサーとして、また異文化の交流の分野でご尽力をされていますが、多彩な活動から感じること、また日本からどのようなメッセージを発信すべきか、その可能性などをお話いただきたいと思います。それでは、

まずイベントがもたらす『変化』について、皆さんのご意見をお願いします。

鬼頭 このシンポジウムに際して、私自身の体験したこれまでの重大イベントは何か？ということをリストにしてみました。そうすると生れて以来、イベントの連続なんですね。まず、私の生れた1947年に日本国憲法が施行されました。その後も、安保闘争や月面着陸など強いインパクトを受けた社会的な事件や出来事が多々ありました。それから、結婚や出産、親の死などもありますが、人生におけるこうした出来事は、私の専門である人口学では「ライフイベント」という言葉に該当します。先程、堺屋さんもおっしゃっていた“時代は大きく変わった”と感じたのは、私にとっては89年の「1.57ショック」ですね。それと、私の研究上で興味深いのは、2005年に日本の人口が減少し始めたのが分かったということです。それまで増加する人口に対して様々な施策が講じられていたのが、今

モダレーター

宮本倫明 (Landa Associates Ltd 代表)

パネリスト

鬼頭宏 (上智大学大学院地球環境学研究科教授・地球環境研究所所長)

鈴木大地 (順天堂大学准教授・ソウル五輪金メダリスト・ワールドオリンピアンズアソシエーション理事)

マリ・クリスティーヌ (異文化コミュニケーター イベント学会顧問)

度はその人口を維持しなければならないという方向に一転した。これも大きなイベント、社会問題ですね。

宮本 その「1.57ショック」とはどのような問題でしょうか？

鬼頭 これは、女性が生涯に生む子どもの数、つまり出生率が1.57になったことを「1.57ショック」と呼んでいます。出生率は、2.07程度でないと将来人口の維持が難しいと言われていますが、1975年には2を割り始めたんですね。つまり少子化というのは、本当は30年以上前から続いていたんです。

宮本 人口の変化ということも、一つのキーワードになりそうですね。マリさんは、愛知万博の広報や異文化コミュニケーターという活動を通じて、世界各国の方との交流をお持ちですが、イベントがもたらす変化ということにどのようなご意見をお持ちでしょうか。

マリ 一つは“万博に行く”という行為の認識が、日本人と欧米の方では大きく違いますね。欧米の人には非常にエポック的な出来事として捉えられています。日本でも、1970年の万博の時は日本中が盛り上がり、多くの人々のエポック・メイキングとなったと思いますが、愛知万博ではそこまでの雰囲気は無く、温度差のようなものを感じました。広報の予算も非常に少なく、草の根的な動きをすることになりましたが、もっと多くの外国人の方に来ていただき、情報交流を行えるせっかくの大きなチャンスを、ローカルなものにとどめてしまったと感じる部分もありました。ただ、地元の人にはもの凄いエネルギーで変化を与え、大きな財産を残したことは確かです。

宮本 地域の人達が盛り上がったという点では、非常に大きな成果でしたね。一方で、外国人の入場者が全体の1%というものは少し残念なことです。

マリ コミュニケーション不足は、何も万博だけではなく海外の方が持っている日本に対するイメージにも当てはまると思うんです。彼らのイメージは、日本から戦略的に発信されているのではなく、自国のメディア

が取り上げた情報から受けたものなんですね。日本特有の奥床しさという文化も大切ですが、日本を知ってもらうために、もっと積極的に外に目を向けるというのも重要だと思います。

宮本 私も小学生の時に、非常に大きなワクワク感を抱いて大阪万博に行きましたので、今のお話は共感いたします。オリンピックは万博とは違うスタイルのビッグイベントですが、今日は鈴木先生から、スライドを交えて近年のオリンピックの変化を紹介いただけるということです。

鈴木 1964年に東京オリンピックが行われ、その20年後、84年のロス五輪からオリンピックが変わったと言われております。ピーター・ユベロス氏が組織委員長として活躍し、現在の商業主義のスタイルになっ

パネリスト



上智大学大学院
地球環境学研究科教授
地球環境研究所所長

鬼頭宏 きてう ひろし

日本国憲法施行の年に生れた「団塊」の走りである。小学校では2年間、気象観測を続け、慶應の中學・高校を通して植物を研究。当時、尊敬というより親近感を抱いた人物は、アンリ・ファーブル、牧野富太郎、そして昭和天皇であった。共通項は生物。経済学部に進学しても、お金を数えることより、高度成長とともに消えていった過去の暮らしに興味を持って経済史を専攻。大学院では速水融教授のもとで誕生間もない歴史人口学をみっちり仕込まれた。

生物への興味は人口研究へ、人口研究からは生活様式すなわち文明研究、そして環境へと関心は広がってきた。少子高齢化は近代文明の究極的な人口学的状況である。江戸時代の2倍にもなった人生をどう生きるのか？個人および社会システムの面から「生命の時間」について考えていきたい。また地球環境問題の解決についても、さまざまな時間概念との調和が鍵と思っている。



た。私が初めて参加したオリンピックでもあります、至る所に清涼飲料水が無料で置いてあったこと、オリンピックのムードに圧倒されて非常に緊張したことによく覚えています。

宮本 その時、おいくつだったんですか？

世界を「フラット化」させる オリンピックの効用

鈴木 17歳です。4年後のソウル五輪で金メダルを取りましたが、お隣の国ということもあり私にとってはリラックスして^{ウォーターキューブ}参加できた大会です。そして今年の北京は、水立方で行われた競泳を中心に見てきましたが、中国という国が大きく変わったという点は皆さんもテレビでご覧になったと思います。それで、

パネリスト



順天堂大学准教授
ソウル五輪金メダリスト
ワールドオリンピアンズ
アソシエーション理事
鈴木 大地 すずき だいち

1988年ソウルオリンピック100m背泳ぎで金メダルを獲得。バサロ泳法で有名。水泳選手引退後、ハーバード大学水泳部のゲストコーチ（日本オリンピック委員会派遣）を務めた。現在は、母校・順天堂大学スポーツ健康科学部准教授（体育学修士、医学博士）として勤務。同水泳部監督のほか、日本オリンピック委員会アスリート委員会委員、日本水泳連盟競泳委員会委員、世界オリンピアンズ協会（WOA）理事、日本オリンピアンズ協会（OAJ）理事、日本アンチドーピング機構理事も務める。2007年順天堂大学より「健康関連イベント参加者の生活習慣と健康状態に関する研究をテーマにした分析」で博士号を取得。最近は、「メタボリック症候群と運動習慣に関する研究」や「ベリーダンスと女性の健康など運動と健康に関する調査研究」を行っている。

今回の北京で感じた、イベント（オリンピック）がもたらす変化というものをまとめてみましたが「ファッションが洗練」「電化製品が普及」「マナーが向上」「人種にかかわらずチャンス」「道具も均一化」「競技レベルが一般化」といったことが挙げられると思います。競技レベルが一般化というのは、今回のオリンピックで驚いた技でも、次のオリンピックでは一般的なものになり、全体の水準が上がるという意味です。

宮本 鈴木先生ご自身も、度肝を抜くバサロで、競技のルールを変えさせる泳ぎを披露しましたからね（笑）。

鈴木 そうですね。オリンピックは色々な意味で平均化する契機でもあり「地球をフラット化させる！？」というのが私の持論です。

人々にインパクトを与える イベントとは？

宮本 色々なものを変化させる、これはイベントの重要な意義もあります。特に、万博やオリンピックは、国家の通過儀礼として先進国に向かうための一つの目標と考えられている。逆に言えば、一度経験をした国には、非日常性が薄れてしまうところがあり、マリさんが言われたような大阪万博と愛知万博の温度差になるのかもしれませんね。大阪万博と同じワクワク感を持ち難くなってしまった。ある意味で、中国の人方が



らやましいと、北京オリンピックを見ていて感じました。“その感覚はもう我々は体験できないのか？”という議論を2番目のお題にしたいと思います。すばり、インパクトのあるイベントとは？ということを考えていきたいと思います。まず、私の意見から述べさせていただきますと、マリさんから愛知万博は地元の意識を大きく変えたというお話がありました。イベントという共通体験による意識改革も非常に大事ではないかと。地域や日本を元気にする意味でも大きな効果が得られるのに、予算の面でも官僚V.S.民間のような形で、お互いに消耗してシェリングクてしまっている。“何か面白いことをやろう！”というムードが削ぎ取られてしまっていると感じています。

マリ お金の問題だけではないと思います。例えば、みんなで物を持ち寄って始まったアグリカルチャーフェアを見ても、地元の自然発生的なものが商業的なものに変化し、スポンサーが付かないと実施できないような形になっているわけです。と言うことは、イベントが自然発生するムードづくり、みんなが参加できる、共通認識を持てるような環境というのが大事だと思うんですね。私はクルマが好きで、以前フィンランドのユヴァスキラという町にWRCのラリーを見に行きました。人口1,000人にも満たない地域に、年間何万人の人々が訪れるんですが、町の人達が総出で運営のサポートをしたり、自宅の庭先で手作りのクッ

キーやコーヒーを無料で提供したり。それはWRCの予算ではなく、毎年アイデアを出して住民が自発的にやっている。町がラリーに便乗して一緒に盛り上がる。参加することによって自分も楽しい。交流ができる。そういう楽しみを覚えてしまったんですね。大きなイベントを作っていく上では、周囲の気持ちも一緒になって盛り上げていかないと、単に予算が付いたということだけでは限界があると思います。

未来志向のコンテンツが 目指すべき方向性

鬼頭 とても面白いお話ですね。私なりに、イベントにはどういうものがあるのかを整理してみると、一つは日、月、年に沿ったイベント。昔はそれによって、1日、あるいは1年が変わっていくための重要な儀式として行われた。次は、人生における「ライフイベント」。時代が変わる、天皇や王朝、社会体制が変わるというイベントもあります。もう一つは、今のお話のように、広がりのある、人の付き合いの範囲を広げていくようなイベントもあるのだなと、興味深く聞いておりました。鈴木さんのおっしゃる「フラット化」というのも、全くその通りだと思います。日本が幕末から明治に変わる時には、パリやロンドンの万博に出展

パネリスト



異文化コミュニケーター
イベント学会顧問
マリ・クリスティーヌ

4歳まで日本で暮らした後、父親の仕事に従い、ドイツ、アメリカ、イラン、タイなどで生活。1979年上智大学国際学部比較文化学科卒業。1994年東京工業大学大学院工学研究科社会工学修士課程終了。博士課程満期終了。

異文化コミュニケーターとして、生ながらの環境から学んだ幅広い視点から国際会議・式典などの司会、講演活動など多方面で活躍。1996年～AWC（アジア女性と子どもネットワーク）代表。2000年～国際連合人間居住計画（国連ハビタット）親善大使。2002年～2005年「愛・地球博」広報プロデューサー。2005年～日本文化デザイン会議「2006年徳島」議長。

現在「愛・地球博」瀬戸会場愛知県館跡の「あいち海上の森」名譽センター長を務める。



して、その文明を吸収しよう考えた。東京、ソウル、北京のオリンピックの開催前10年間の経済成長率を調べると、日本が一番高いですが概ね10%ぐらいで推移していて、発展の仕方も非常に似ている。今年の春、中国に行った時にポスターで一番目にしたのは「文明建設」と「和階社会」なんですね。つまり、ワールドスタンダードをいかに自分のものにするか？それに向かって全てが動いていく。しかし、その目標を達成してしまったら、次は何か。新しく何かを打ち出そうという時に、何をしたら良いのかと萎縮しているのではと感じますね。未来指向型のコンテンツのヒントは、もしかしたら先日の洞爺湖サミットにあるのかもしれないし、全く別物かもしれない。大事なのは、どの方向に向かって行きたいのか？ではないでしょうか。

宮本 確かに、洞爺湖サミットは温暖化に対する様々なアクションを活発にしていますが、どれも単発で大きな熱気には達していない。みんなが心を通い合わせるような、演出や仕掛けが必要なのかもしれませんね。環境問題だけでなく、目的に向かって大きなムーブメントを起こすために、どういった方向性が必要なのでしょうか？

マリ まず、日本には国を挙げてのイベントが見当たらないと思います。例えば、モナコは映画祭やラリーなど、大勢の外国人が訪れる定期的なイベントがいくつもあります。外国人が、この時期はぜひ日本に行きたいと思うようなイベントを、何か一つでも考えていくことが大事なのかなと思いますね。

宮本 国が単位として考えるのが望ましいですか？

マリ それが日本には欠けていると思いますよ。他国は、例えばタイなら国王や女王陛下の誕生日、母の日などが国家行事として行われているんです。

宮本 国家を挙げてということでは、日本は万博とオリンピックしか考えていないのかもしれないですね。

マリ 何か、国民みんなが参加して共有できる、気持ちが一つにつながるような何かが必要だと思いませんか？東京や札幌など、その地域だけのイベントではなく、イースター・パレードのように全土で同時に見えるようなものが。

鬼頭 日本は先進国の中で、最も祝祭日が多い国なんですね。法定の休日以外は、なかなか休みを取らないという背景もあるかと思いますが。その祝祭日に、マ

リさんがおっしゃるような、みんなが一緒に祝いをするということが無くなっています。伝統的な行事や祭事の息を吹き返させる、国家的な行事というより、国民単位のつながりを広げるということも一つの考え方ですね。それから、健康フェスティバルのようなものを新しい概念でやってみる。世界を巻き込んだ形で発信してみるという考え方もありますね。

鈴木 ビジネス上難しいかもしれません、休日をある時期に集中させて時間を作るという考え方もありますよね。例えば7月～8月に大きな連休を設け、まとまった時間ができれば、何かやりたいという気運も生じて来るんじゃないでしょうか。

万博、オリンピックに肩を並べる 日本初の国際イベントの可能性

宮本 現在の日本で、国民的な盛り上がりがあって、共通の楽しみを感じているものとしては、桜の季節のお花見と夏の花火大会。そういうものをテコに何かを考えていく。世界に対して情報発信をしていくという方法もあるかもしれませんね。あと、万博やオリンピックなど、どの国に持っていくても開催できる、移植可能なイベントというものを、日本の文化の中から生み出していくことは考えられないでしょうか。少々、高度な課題かもしれません。



国として世界に誇れるような、世界中から外国人が訪れるようなイベントを考えいただきたい。ここにはプロの方がたくさんいらっしゃるので、ぜひよろしくお願いします。

宮本 堀屋先生からも、21世紀にふさわしいイベントで新しい価値を創造して欲しいというお話をございました。健康、スポーツ、環境など、考えるべきテーマは色々とございます。ぜひ、この学会の活動を通じて、新しい価値を生み出していきたいと思います。

女性、学生の参加によって、 さらにアクティブな学会に

マリ それと、イベント学会にご提案したいことが一つございます。理事も女性は一人、非常に女性が少ない学会なんですね。イベントは男女問わずの世界です。ぜひ女性の方にも積極的に参加していただきたい。今日は女性も大勢いらっしゃっていますので活動に参加していただき、イベントをさらに世の中に浸透させていきたいと思います。

宮本 そうですね。従来の大会は会員だけの参加でしたが、今回はより多角的な活動として開催した初めてのケースです。女性も大勢ご参加いただきましたし、将来を担う学生の皆さん的存在も心強い。これを機に、さらに輪を広げていきたいと思いますので宜しくお願ひいたします。本日はありがとうございました。

〈敬称略〉

モダレーター



Landa Associates Ltd 代表
宮本 倫明 みやもとりんめい

地域経済開発プロデューサー。「うつくしま未来博」(福島県)などの地方の大型イベントの総合プロデューサーを務める。「えひめ町並み博2004」(愛媛県)では「日本イベント大賞」「PRアワードグランプリ」などを受賞。地域プランディングプロデューサーとしても評価を受ける。イベントを活用した社会起業誘発など社会変革が専門。

展示発表 多様な発表形式にチャレンジ

今回の記念大会では、より多くの情報発信を行い会員相互の情報交流を深めるために、展示発表エリアを設け、ブース発表、映像発表、ポスター発表など、多様な発表形式を採用した。



■展示発表

10の企業および団体のブースで賑わう会場。イベントのPRやイベント関連書籍の販売、飲料のサンプリングが行われた。会場上部に設置されたモニターでは、事例紹介やPR映像がオンエアされた。

■参加企業・団体■

大塚製薬(株)／(株)ぎょうせい／慶應大学・上智大学・早稲田大学学園祭実行委員会／(株)電通／特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会／(社)日本イベント産業振興協会／(株)博報堂／(財)まちみらい千代田／(株)ムラヤマ／(財)横浜開港150周年協会

■映像発表



(株)サンライズ
「現代の、モバイルとPCの動画配信事情」
特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会
「2016年、東京オリンピック開催を目指して」
(財)まちみらい千代田
「江戸天下祭」

■ポスター発表

7名の皆さんより、ポスターや資料による発表と口頭説明で研究成果の報告が行われた。



池田 美和子 (社)日本フィットネス協会
「フィットネスダンスフェスティバルを全国に広げよう!」

金 優佳 慶應義塾大学大学院政策メディア研究科
「生活者主導のイベントー「100万人のキャンドルナイト」を事例にしてー」

室井 淳司 (株)博報堂
「ブランド戦略に基づいた実体験とはー実体験領域施策立案に関する手法研究」

須賀 綾乃 順天堂大学生涯スポーツ国際比較研究室
「マスターズイベントにおける参加者満足度～掴もう!!マスターズのこころ～」

萩 裕美子 鹿屋体育大学
「チャレンジデー(参加型スポーツイベント)が開催地にもたらす効果の検証」

三ツ元二郎 (株)ムラヤマ
「イベントとエコ」

師岡 文男 中間法人 スポーツフォーライフジャパン
「第一回スポーツフォーライフゲームズ/アジア・パシフィック開催の意義と可能性」

10周年記念パーティ ~振り返れば未来~

3日のプログラムの締め括りに行われた10周年記念パーティ。会場の主婦会館には、会員はもちろん、シンポジウムのパネリスト、そして大勢の学生の皆さんにもご参加いただき、世代間の交流を深める活気あふれるパーティとなった。学会創立以来のメンバーである川本副理事長によるスライドプレゼンテーション「振り返れば未来」も上映され、設立当時の思い出話などを交えながら、イベント学会の10年の歩みが紹介された。



成田 純治副理事長／(株)博報堂 代表取締役社長。「イベントの活力で、ぜひ不景気感に包まれた日本全体を盛り上げたい」と乾杯の挨拶。



堺屋太一会長。「面白いことを考えると、世の中が活気づいて新しいものが生れる。これぞイベント。皆様の力で社会を明るく面白くしたい」と挨拶。



160名を超える皆さんにお集まりいただき大盛況となったパーティ会場。



石川 雅己千代田区長。ご来賓を代表してご挨拶をいただいた。



次世代を担う若手の参加によって、パーティ会場はさらに活気あふれるムードに。



大勢の皆さんとの記念撮影にも快くお応えいただいた鈴木大地氏。ありがとうございました。

イベント学会2008年度研究助成受付開始

イベントに関する理論や技術の開発に資するように、2004年から始めました「イベント学会研究助成」を今年は以下の要項で募集致します。特に若手研究者、大学院生などからの応募をお待ちしております。

応募資格 助成金交付時点(2008年12月予定)でイベント学会会員であること。
個人およびグループで応募できます。

助成金 1件20万円以内

応募締め切り 2008年11月14日(金)

報告書提出締め切り 2009年5月29日(金)

応募方法 申込用紙(学会のHPからダウンロードまたは事務局に請求)に必要事項を記入の上、学会宛てに郵送・宅送または持参して下さい。

応募先 イベント学会事務局

詳しいことはイベント学会事務局までお問い合わせ下さい
TEL : 03-5215-1680 FAX : 03-3238-7834 E-mail : info01@eventology.org

口頭発表

会員の研究成果を相互交換

2日目は、3つの教室を使い、1人当たり20分の持ち時間で午前・午後を合わせて29件の口頭発表が行われた。イベントに携わる人、学ぶ人、教える人、それぞれの立場での研究成果や事例、体験談などの報告や質疑応答によってお互いの情報を交換。販促イベント、地域イベント、社会貢献やスポーツイベントなど、幅広いジャンルのノウハウが会員間で共有された。



Aグループ

- ◆ 岩崎 博 (有)エスシー・プランニング・オフィス 「イベントナビ」の狙いと展開 イベントポータルサイトへの挑戦
- ◆ 平良 斗星 地球情報エージェント 沖縄のイベント情報を一本化し、すべての人が使えるデータベース「沖縄イベント情報プラットフォーム」について
- ◆ 内川 美紀 (株)サンライズ 現代のモバイルとPCの動画配信事情
- ◆ 武田 吉剛 TSP太陽(株) イベント事業開発のためのシミュレーション・システム活用
- ◆ 宮本 倫明 (有)Landa Associates Ltd イベントの手法を用いたコミュニティイノベーション
- ◆ 光井 勇人 エイジ・エンタテイメント 「New Age—イベント学の未来のために—」
- ◆ 山田 满 順天堂大学スポーツ健康科学部 スポーツマネジメント学科 2008年箱根駅伝広報効果の研究
—順大、早大、駒大に関する調査研究—
- ◆ 岩崎 博 (有)エスシー・プランニング・オフィス 自治体イベントの効果評価の方策
標準的な手法への現実的なあり方を巡って
- ◆ 木原 隆人 (株)電通りサーチ 店舗行動を誘発する展示会の経験価値



29件の発表が行われた3つの教室は大勢の参加者で賑わった。

Bグループ

- ◆ 宮木 宗治 (社)日本イベント産業振興協会 都市政策におけるイベントの新たな役割
- ◆ 宮田 隆 アジェンダNOVAながさき イベントで地方を変革し、地方から発信する
=地方文化の発掘“長崎の宗教と文化”=
- ◆ 谷國 大輔 (株)パリーオ 地域発信型映画と連動した地域イベントに関する研究
～(その1)地域発信型映画と関連性のある地域イベントの事例分析～
- ◆ 辻井 勝 ピーススタイル(株) ビジネス展示会における来場活動・意向把握システム
- ◆ 末広 英之 (株)博報堂 ブランド戦略に基づいた実体験とは
実体験領域施策立案に関する手法研究
- ◆ 栗原 肇 (株)電通 展示意匠と態度変化の研究②
- ◆ 佐野吉彦 順天堂大学大学院生涯スポーツ国際比較研究室 チャレンジデーとソーシャルマーケティング
- ◆ 高田佳子 (株)アートランド 行政の健康教育事業の地域住民との協働のあり方の検討
—健康教育事業でのイベントノウハウを有する人材活用の可能性を探る—
- ◆ 那須 黙 日本おにぎり隊 民族・宗教・国歌・ジェネレーション、様々な“差”を認め合う
空間創りの試み 日本人だから出来る「おにぎり」による予防外交
- ◆ 師岡 文男 (財)まちみらい千代田 「江戸天下祭」「神田古本まつり」「千代田さくらまつり」の
経済波及効果



参加者との活発な意見交換が行われた質疑応答。

Cグループ

- ◆ 小島 敏明 (株)乃村工藝社 CSR活動におけるイベントの役割
- ◆ 野川 春夫 順天堂大学スポーツ健康科学部 スポーツ・ツーリズム誘発型の都市型スポーツイベント
～観るスポーツとするスポーツに着目して～
- ◆ 中島 悠 アースデー東京2008実行委員会 環境配慮型イベントのマネジメントについて
- ◆ 田中 暢子 英国ラバーラ大学大学院スポーツ・レジャー政策研究室 一般スポーツ団体から発信する「障害者スポーツ推進の取り組み」におけるジレンマ
～社団法人アロピック連盟の取り組みの事例研究～
- ◆ 柴田 祐香 2016年東京オリンピックを望む学生の会 全国総断オリンピックキャラバン～2016年東京オリンピック招致の旅～
- ◆ 山田 大輔 順天堂大学大学院生涯スポーツ国際比較研究室 大スポーツイベントにおけるエコ対策の現状と課題～東京マラソンを事例として～
- ◆ 真田 武幸 NPO法人秋葉原で社会貢献を行う市民の会リコリタ 秋葉原におけるソーシャルイベントへの参加動機の作り方
- ◆ 小林 雄二 (株)テー・オーダブリュー 伸ばせ、イベント演出力(身の回りに活用できる演出テクニック)

◆ 斎藤 泰弘 特定非営利法人アースディ・エブリディ

- 生物多様性を取り入れた持続可能な新しい地域コミュニティの提言(生物多様性アカデミー)
◆ 河野磨美子 (財)地域環境戦略研究機関 持続性センター エコアクション21中央事務局
エコアクション21を活用した環境に配慮したイベント開催のためのマニュアル
環境に配慮したイベントの認証・登録

◆閉会式◆



10周年記念大会実行委員会 師岡文男副委員長による総括で閉会。

『みなさん お疲れ様でした!』



今回写り損ねた方は来年の大会までしばらくお待ちください。

「10周年記念大会」はボランティアで参加していただいた実行委員を中心
に、法人会員のご支援をいただきながら計画から本番実施まで手作りで推進してきました。学会の研究大会に慣れている「大学の先生方」のご指導により研究大会を初めて経験する「イベントのプロ」、「学生スタッフ」、「一般ボランティア」と様々な面々が加わり、

写真のような運営チームが出現しました。年齢差は最高60歳、即席の混成チームというハンデもあって戸惑いや失敗も多くありましたが、仲良く元気に2日間を乗り切ることができました。研究発表者のみなさんと共に大会を盛り上げていただきました運営チームのみなさんにあらためてお礼を申し上げます。

イベント学会事務局長 小林 政則



「イベント学のすすめ」を発刊



イベント学会創立10周年を記念して、歴史、社会、経済、観光、法令、デザイン、都市工学、スポーツなど、イベントにかかわりの深いテーマで学会会員23名が執筆しました。創立時からの会員による「イベント学会10年の歩みを語る座談会」や「イベント研究論文の基本的な書き方」も加えて実務者はもちろん、イベントを学ぶ学生の教科書や入門書としても最適です。

A5判・定価2,600円(税込)

*学会会員は1割引で購入できます。詳しくは事務局までお問い合わせください。

〈イベント学会会員の皆様へ〉

事例や研究成果が満載! イベント成功の秘訣を学ぶ

イベント学の すすめ

イベント学会編
会長 堀屋太一

● A5判・定価2,600円(本体2,476円+税) 送料340円 ※定価は5%税込価格です。
イベント学会会員特価: 10%OFF ※詳しくは学会事務局へ

本書の特色

- イベント学会創立10周年を記念して出版。イベントにかかわりの深い、経済、マーケティング、広告、デザイン、都市工学、建築、スポーツなど多方面の研究者・実務者が、具体的な事例等を盛り込み、わかりやすく解説。
- 成功体験や実務的なノウハウだけでなく、年表や論文集も収録し、「イベント」を学問の研究対象として捉えた画期的な書。
- イベント実務者はもちろん、イベントを学ぶ学生の教科書や入門書としても最適。
- 地方自治体、各種公益法人、NPO法人、イベント関係事業の法人など、イベントに関わるすべての方にお薦めの一冊。



イベント学が21世紀を拓く!

イベントのもつ非日常の体験こそが社会を変える力をもつ。
各界の研究者、学生、ビジネスマンなど、
変革への意志をもつすべての人々にイベント学を薦める。

イベント学会会長 堀屋太一

ホームページからもご注文を承ります。 URL : <http://www.gyosei.co.jp>

ご注文・お問合せ・
資料請求は右記まで

株式会社 ぎょうせい
〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16
TEL(03) 5349-6666 FAX(03) 5349-6677

フリーコール(通話料無料)
TEL:0120-953-431 FAX:0120-953-495
電話受付(平日9時~17時)